
What connects bonds

light

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

What connects bonds

【Nコード】

N0424BA

【作者名】

light

【あらすじ】

今の暮らしに違和感を感じている中学生、金森 陵は学校で不思議な体験をした。ある男に神子だと告げられ、異世界に連れ去られそうになった。ペンダントの力で男からは逃れることができたが異世界に飛んでしまった。陵は自分の正体をするために異世界の人々と行動を開始した。

この小説はpixivでも書きました。（文章が少し変わってます。改良かもしれませんが、改悪かもしれません。）

プロローグ1 違和感

暖かい春の日差しが降り注ぐ中、制服を着た生徒たちが屋上で寛いでいた。

その中の一人、金森かねもり 陵りょうは空を見上げた。

真っ先に目に入ったのは青く澄み渡った空に浮く小さな雲。

その雲から視線をずらすと目も開けていられないような眩しさを
持っている太陽。

視線を戻すと白色の大きな建物の一部が見えるだけ。

「何か……違うんだよな」

その何かを上手く言い表す事は難しい。

それに相応しい言葉が出そうになっては引っ込んでいく。

俺はその何かを見つけない。そう思っている。

だけど考えれば考えるほど分からなくなって混乱する。

だから、もう考えないことにしよう、と誓ったはずなのに……。

やはり気になってしまう。

どうすればこの違和感から逃れることが出来るのだろうか。

幼いころからの問いの答えは未だに出ない。

授業のチャイムが鳴ったのを合図にして俺はこの場を去った。

俺は教室へ戻るために廊下を歩いていった。

屋上なんかに行かなければ良かった。

俺は三年生だから教室は近いが、今の時間は理科室へ行かなければならなかったのだ。

どうしてこんなことを忘れていたんだろう。

そのまま直行できればよかったが残念なことに教科書は教室だ。授業はもう始まっているだろうし、遅れていくのも恥ずかしい。仮病で保健室にでも行こうか……。

そう思い教室を通り過ぎて保健室へ向った。

他の教室の前を通った時に声がしなかったところをみると他のクラスも移動教室っぽいな。

じゃあ誰にも俺の姿を見咎められる事はないわけだ。

そう思って油断していたら思わぬところに伏兵がいた。

「そこのお兄さん」

「俺のことですか？」

考え事をしている最中に後ろから声を掛けられて振り向くと、そこには先生でもこの学校の生徒でもない小学生らしい少女がいた。見たところ少女はまだ低学年くらいの可愛らしい容姿をしている。だけど不思議だ。今日は月曜日だからこの少女も学校があるはずなのに。

俺が不思議そうに見ていると少女は嬉しそうに微笑んで近付いてきた。

「そうよ。お兄さん、これ」

少女が差し出したのは小さなペンダントだった。

「これは落とし物なのか？ だったら俺のじゃない。きっと他の人のだよ」

そう答えると少女はクスクス笑って俺の手にペンダントを押し付けた。

少女が顔に似合わない不気味な微笑みを見せた。それは子供の無邪気さとはまるで違う含みを持つ大人の微笑だった。

「いえ、これは貴方の落とし物よ。忘れたの？」

少女はまるで俺と会ったことがあるかのように話しかけてきた。仕方ないのでペンダントの形状を見直してみた。ペンダントの先には宝石のような石が付けられていて高価そうな感じがした。

こんな高価そうなもの俺が持っているはずがない。

「……俺はこんなペンダント知らないよ」

「嘘よ。これは貴方のものだもの。私は憶えてるんだから」

「憶えてるって何を？」

思わずそう聞き返してしまった。少女が俺のことを知っているはずがないんだ。

だから答えられるはずがない。

「貴方のこと……。貴方の感じている違和感のこと。」

この少女は超能力を使えなくても言うように俺の一番の悩みを言った。

少女はさらに俺に近付いて笑った。

「」

少女が日本語とは違う言語で何かを告げた。
英語とも違う言語だったので俺には理解できなかった。
だが俺の頭の中を少女の言葉が駆け巡る。
今まで感じたことがないくらいに自分の中の何かが心の中で動き
回っている。

どこかで聞いたことがあったかも知れない。
だけどそれがどこでは思い出せなかった。

「……………それは……………」

少女がまたクスクスと笑いながら、俺の頭に手を当てた。
その笑い声は俺を恐怖に陥れるには十分な不気味さを持っていた。

「忠告しといてあげるわ。貴方はじきに連れ去られる。この世界と
は違う場所に」

俺の頭は真っ白になった。もしかしたら告げられた言葉は冗談か
もしれない。

だけど、このときの状況はありえないことを信じさせるには十分
な雰囲気を持っていた。

思わず持たされていたペンダントを強く握った。

「この世界とは違う場所……………？ それって……………」

俺は何を言おうとしていたのか……………。
全てを言い終わる前に激しい頭痛がして、その場にしゃがみこむ。
いくつかの映像と音声が頭の中を巡る。

『私の可愛いカール……』

女性が愛おしそうに子供を抱きしめている。
場所はどこかの小さな部屋だった。
子供は眠っているのか身動き一つしていない。

『カール……カールっ!!』

必死に子供の名前を叫ぶ女性と赤子を乱暴に持つ兵士たち。
女性は兵士の持つ槍に遮られながらも子供を取り返そうとあがく。

『お前は…………。』

兵士が少年に告げた言葉は肝心な所が抜けていた。
それを思い出そうとすると先ほどよりも強い頭痛が俺を襲う。

「……っ、これは……?」

顔の……特に額の辺りが熱くなる。
その部分に手を伸ばしたが特に異常はない。
それと同時に目の前が明るい光に包まれる。
その光の中で俺は何を見たのだろうか。
自然と涙が伝い俺の心を熱くする何か。
やがて、俺の意識は明光から暗闇の中に落ちていった。

「思い出してくれたかなあ。そのペンダントにこめられた思いを…

…。」

先ほどまでの不気味さが嘘のように少女は悲しげに微笑んだ。
その少女は陵の手に握られたままのペンダントを陵の首につけた。

「貴方が連れ去られたとき貴方が正しい道を歩めますように」

少女は祈るように呟いた。

プロローグ2 ～ペンダント～

目覚めるとそこは白いカーテンで包まれた部屋だった。

少し考えて、ここが保健室だとは判った。

でも、どうして俺が保健室にいるのか分からない。

俺、どうしたんだっけ……？

勢い良く上半身を起こして、カーテンに向って手を伸ばす。

伸ばした指が冷たい布を救い上げる前に別の存在によってカーテ

ンが開けられた。

そこに居たのは日野坂ひのさかと書かれたプレートひのさかを胸につけた女性だった。

この女性は保険医で、多分だけ何かがあつた俺を保健室で休ませてくださいたんだらう。

日野坂先生は優しくそうに微笑んで俺の額に添えた。

「大丈夫そうね。廊下で倒れていたときはビックリしたわよ。本当に意識もなかったから」

そうか、俺は倒れていたのか……。

不思議そうな顔をする俺に気付いたのか日野坂先生は、そのときの状況を説明しだした。

「えっと……金森君は保健室近くの廊下に倒れていて私が見つけたの。怪我とかは無いみたいだし、熱も無かったから保健室のベッドに寝かせておいたの」

保健室近くの廊下……か。そこで何が起こつたんだらう。

自分のことなのに思い出せない。また心のモヤモヤが増えた。

「すみません。何も思い出せません……」

「いいのよ。それで今日はどうする。授業に戻るか家に帰るか好きなほうを選んで」

「じゃあ授業に戻ります」

こんな元気な状態で帰っても暇だろうしな。
俺は日野坂先生にお礼を言って保健室を後にした。

陵のことを気遣っていた日野坂は一人になってから呟いた。

「あの子……。寝言で帰りたいつて言ってたけど本当は家に帰りたかったのかしら？」

日野坂はその言葉の意味を理解できただろうか。いや……。できなかっただろう。

「でも、夢と現実の違いわよね」

日野坂は自分の考えが間違っていたと言うように頭を振った。

教室へ戻る前に時計を見た。時計は11時32分を示していた。

「まだ4時限目は始まってないんだな……」

4時限目の授業はなんだったか考えながら頭を掻く。

そのまま首の後ろに手を当てると、指に硬く冷たいものが当たった。

俺は驚いてそれを指でたどった。

どうやらそれはペンダントのようで上手い具合に服の中に入り込んでいた。

「どうしてこんなものを……」

そのペンダントは俺の知らないものだったが、どこかで見たような気もする。

ネックレスについている透明な丸い石がまるで宝石のように見えた。

どこか高価そうな雰囲気を漂わせる宝石のような石が俺の手の中で輝いた。

こんな高価そうなペンダントを俺が持っているはずがない。

そもそも俺は学校にペンダントを付けて来たことなんてないんだ。

「このペンダントは……」

どこかで買ったんだっけ？ 誰かに貰ったんだっけ？

記憶の糸を辿っていくが答えは出ない。

とりあえず校則違反になるから外そうとペンダントに手をかけた。

ペンダントに触れた瞬間、俺の視界が歪んだ気がする。

いきなりで思わずペンダントから手を離してしまった。

それはほんの一瞬で確認する事は不可能だと思われた。

眩暈……かな……？ まさか倒れた原因……？ それとも倒れた

ときに頭でも強く打ったか……？

俺は頭を押さえた。一応、こぶはできていないようだ。

気を取り直して再びペンダントに触れる。もう先ほどのような眩暈は起きなかった。

ペンダントをそのまま外して蛍光灯にかざしてみた。

「綺麗だな……………」

光り輝く石に気をとられ思わず呟いた。

それと同時に近くを事務の先生が走って通り過ぎていくのを見た。タイミングが良すぎた。俺はペンダントを見られていないか不安になってしまった。

だが立ち止まらなかったところを見ると気づかれてはいないようだ。

それにしても少し急ぎすぎじゃないだろうか。

時計を見ると11時38分。授業開始まであと2分を切っている。

ああ、授業か……と納得すると同時に階段へ向った。

ペンダントを急いでポケットにしまいながら歩いていると後ろから誰かの視線を感じてふり返る。

だがそこには誰もいなく、勘違いか……と再び教室に向かって歩き始めた。

「あの子、結構勘が良さそうね。私たちの気配に一瞬だけ気付いた」

「そうね。素質はあるみたいだから……………」

「そういえば、あんたの渡し方だけどさあ、もうちょっとマシな方ははなかったの？」

「…………悪い？久しぶりだったから」

「一応、記憶は消しておいたけど……。バレたら駄目なの分かってる?」

「そんなこと分かってるわ……。でも、私の気持ちは貴方には分からないでしょうね」

そう絶対に分からない……。この気持ちは当事者である自分にしか分からない……。

隠さなければいけない……。全てを……。

プロローグ3 9人

教室に戻ると友達の佐藤さとう 渉わたると中矢なかや 來らいが駆け寄ってきた。二人とも驚いたような顔をしている。

「おい、もう大丈夫なのか？ 倒れてたって聞いて驚いたし、凄く心配してたんだぞ」

今話しかけてきた、茶髪で元気そうなのが渉で、來は目を隠すほどに伸びた黒髪を揺らしながら頷いている。

かなり心配させてしまったようだ。

「心配してくれてありがとう。俺も自分が倒れてたって聞いて驚いたよ」

「・・・倒れたことに気付かなかったの……？」

來が控えめに発言して首を傾げる。

どう説明したら良いのか分からなかったから曖昧な返事になってしまった。

「気付かなかったというか……。覚えてないっていうか……」

「えっ！！ 覚えていないって大丈夫なのか？ 記憶喪失じゃないのか？」

その渉の言葉に來も心配そうな顔になる。

でも記憶喪失って全部の記憶が消えるんじゃないっけ？

「そんな大げさな……。ちょっと思い出せないだけだっ」

俺は笑って伝えたが、二人はまだ心配そうに俺を見ている。どうすれば信じてもらえるんだろう。

「とにかく俺は大丈夫だから！ チャイム鳴るし席に戻ろう！」

するとタイミングを見計らったようにチャイムが鳴って少し笑ってしまった。

席に着いて教科書を出していると、制服のポケットの部分から熱を感じた。

なんだろうと疑問に思うが熱源になるような物は持っていない。気になってポケットに手を突っ込み中を漁る。

その中であつた丸い何かに手が触れた。その瞬間に頭に流れ込む文字。

『ひじりかわ 聖川 だいすけ 大輔。 いさか 井坂 なつき 夏喜。 さいとう 斎藤 たけし 武。 かわやま 河山 れいこ 礼子。 そとむら 外浦 あい 愛。 も 百
もせ 瀬 たつや 竜也。 たかの 高野 さとる 悟。 こはやし 小林 みちこ 美智子。 さかもと 坂本 あつひこ 彰浩』

流れ込んできたのは名前のようなもの。名前だとすると9人分で、どれも俺の知っている名前だった。

同じ部活の後輩たち、同じ委員会のメンバー、同じクラスの人など……。

あまり親しくない人も混ざっているが、俺は確実に知っている。どうして、こんなことを思い出したんだ……？ それに、この人たちに何の共通点があるんだ？

原因を探ろうと手に触れたものに、もう一度触れてみる。だけど確かめようとしたとき、それは既に熱を失っていた。

さっきの名前は……それに、あの感覚……どこかで……？
いきなりガラツと大きな音がして思考を中断される。
入ってきたのは慌てた様子の先生だった。何かあったのだろうか。
チラツと俺のほうを見た気がしたが多分気のせいだろう。
先生は走ってきたのか汗だけで手に持っているハンカチで顔を拭
いている。

「皆に伝えたいことがある」

先生はいきなり改まってクラス全体に話しかけた。
皆はどうしたんだろうかと先生を見つめた。
俺も不安になって先生のほうを見た。

「今日は午後の授業はない。さっきの休み時間に職員会議があつて
決まった。理由は生徒の数人が行方不明になったからだ。消えたの
は1年生2人、2年生1人、3年生5人だ。この、8人は学校に外
履きが残されたままだったから学校から出たかどうか怪しい。先生
方で話し合った結果、皆は安全確保のため家に帰ってもらう」

これを聞いて他の生徒からは幾つかの疑問が投げかけられたが、
先生は何も答えなかった。

そして俺は疑問ではなく違和感を感じた。

8人か……。じゃあ俺の頭に浮かんだ名前とは関係がない。
そういえば、最後に浮かんだ名前は『坂本 彰浩』で生徒の名前
じゃない。

この名前は国語科の先生の名前だ。もしかしたら……坂本先生も
消えていて、生徒じゃないから除外されているのかもしれない。
普段なら俺もこんなことを考えないだろう。だけど、胸騒ぎが消
えないんだ。

もしかして先生は何かを隠してるんじゃないか？

「それでは解散。あと、金森君は職員室に来るように」

軽く返事をする。先生は安心したように走っていった。

先生はどうして俺を呼んだんだろうか。疑問ばかりが増えていつてしまう。

だけど俺には疑問を解決する術がない。

だったら職員室へ行って坂本先生が消えたかどうか見たほうがいいだろう。

俺は言われたとおり職員室に向かった。

「なあ、消えた人って誰なんだ？」

「さあ……。3年生のほうで確実なのは、このクラスの井坂 夏喜と河山 礼子だな。早退したと思ってたら、まさか消えたなんて……」

「そういえば他のクラスにも早退したらしいって人がいたな……」

クラスのざわめきは教室から人がいなくなるまで続いた。

その中には複数の名前が出てきたが、その関連性を知っているのは、この世界で2人だけだった。

プロローグ4 〈神子〉

職員室に入ると先生方が一斉にこちらを見て驚いた。出入り口の近くでオドオドとしていると聞きなれた声が耳に届いた。

「金森君。こっちへ来てくれ」

手を振られてその場所へ急ぐとそこに居たのは教室で俺を呼び出した先生ではなく、俺の予想をいい意味で裏切った坂本先生だった。俺は安心して、今までの考えを打ち消した。

そして今更のように何で呼び出されたんだろうと考えてみた。そんな俺をよそに坂本先生は衝撃的な言葉を発した。

「君が金森君だね？」

「いきなりなんですか、先生。俺をからかっているんですか？ 毎日学校で会ってるじゃないですか」

そう言うと坂本先生は不気味に笑いながら何かを呟いた。

俺は坂本先生の呟きよりも笑い方に恐怖を覚えた。

どこかで同じように不気味な笑い方をした人を見なかっただろうか。

「君は理解していないだろうから教えてあげるよ」

何を……と聞きかけて気付いた。

この人……そっくりだけど坂本先生じゃない……？

「私は君の言っている坂本という名前じゃないんだ。私の名前はアラン。普通にアランと呼んでくれればいい。あと……仲間からは水竜と呼ばれているよ。そして君が一番気になっっているであろう消えた人たちは、この世界にはいない」

嫌な予感的中してしまい呆然となる。

この世界にはいない……。じゃあどこに居ると言うんだ？

「異世界。今回消えた人たちはそこに行ってもらっている。そして、そこから私と同じように入れ替わったものもある。パレルワールドってしってるかい？ それみたいなものだよ。かなり違うけどね」

意味が理解できない単語がいくつか出てきた。

だけど坂本先生の偽者であるアランは質問する時間をくれなかった。

「今回私たちが事を起こした理由は2つ。1つは間違っただけの世界に飛ばされた闇の神子を探すため。そしてもう1つは敵が飛ばした光の神子を殺すため。この世界には力を使うために必要な物が欠けていたから探すのが大変だったよ。その内の1人が君なんだ」

アランの発言の衝撃が大きすぎて思考が止まりかける。

内容をよく考えてみると、この男がいつも簡単に恐ろしいことを口にしていて驚いた。

アランの言っていることが本当だったら闇の神子の場合生きてるからいいとして、光の神子の場合殺されてしまうってことか……。

そもそも闇の神子とか光の神子とか………いったい何なんだ？

俺が考え事をしているのに気付いたのかアランは俺の前に手を出した。

「こつちの世界にいるかぎり、どちらの神子が分からない。こつちの世界へついてきてもらおうか」

「……なんで俺が神子だと分かるんだよ。闇か光かは知らないとして……」

そう言うと男が愚問だとしても言いたそうに笑った。

馬鹿にされているようで頭にきたが今はそんなことをする場合じゃないようだ。

「それは秘密だよ。正確には俺も知らない。俺はボスから指令を受けて来ただけさ。可能性のある4人の名前を告げられてな」

そこまで言うとアランも急に真剣な顔つきになった。

もう何も話す気はなさそうだ。

「それで、お前が持っているんだろ。時渡りのペンダント。あれが移動に必要なキーアイテムなんだよ」

アランのペンダントという言葉にハツとしてポケットに手を突っ込む。

そこに入っていたペンダントを引っ張り出す。透明だった石は赤色に輝いている。

俺は驚きで言葉を失い、アランは俺の動作を見てニヤツと唇に弧を描かせていた。

「そう、それだ。それは術者が製作者のどちらか一方の意志で移動する。それを私に貸しなさい」

アランが腕を伸ばす。俺はどうすればいいのか分からなかった。アランにこれを渡せば異世界に飛ばされる。渡さなかったところで無理やり奪われるだろう。迷っていると本当にアランの手がペンダントを掴もうとして勢いで振り払ってしまった。

「金森君。君は頭のいい子だと聞いているよ。どうするのが一番いいのか分かるだろう」

痛い目に合いたくなければさっさと渡せ、というところだろうか。それは俺にも分かっている。

だけど……体といえば良いのか意思といえば良いのか、何か俺の中で叫んでいるんだ。このペンダントを渡してはいけない……と

「あいにく俺は馬鹿でね。お前みたいに悪そうな奴にそんな物渡せるか。そもそも、その話が本当かどうか怪しいね」

「……金森君。君は自分が何を言っているのか分かっているのかい？」

アランは優しくそうに微笑んだが目は笑っていなかった。

俺はその答えを口ではなく行動でしめた。

時渡りのペンダントを強く握り締め、アランを睨みつける。

アランに睨み返され少し後ずさりするが態度だけは変えなかった。アランが片手を振り上げ俺の腹を勢いよく殴りつけた。

思ったよりも素早い攻撃に対処が遅れ、後ろに吹き飛ばされる。

あまりの衝撃に息が詰まった。苦しみに耐えながら、後ろの壁を利用して踏ん張る。

話の内容や殴ったことから他の先生が止めたりしないかと心で願ってみたが、職員室に他の人はいない。

辺りを見回している俺に気付いたのか、アランが嘲笑うかのよう
に説明しだした。

「この先生方には少し乱暴でしたが私の力を見てもらいました。
そうしたら大人しく言うことを聞いてくれましたよ。つまり君を
助けようとする愚かな人間はこの部屋にはいないんだ。君にも少し見
せてあげようかな」

アランはポケットから青色に輝く石を取り出して振りかざした。
アランの言葉に従って徐々に輝きを増していく。

「石に込められし数多の精霊よ。我が呼びかけに応じ我が意のまま
に動け」

アランの前に水の塊のような球が生まれた。
嫌な予感がして手前にかざす。

その嫌な予感どおり球が俺めがけて飛んできた。

敵はまだ俺を殺せないだろう。

「だけど……光のほうの神子が普通の人間だったら殺されるんだろ！
俺はまだ死ぬわけにはいかない。頭に浮かんだイメージのまま叫
ぶ。」

「俺は……まだ死にたくない！！ 時渡りのペンダント、俺の意思
に従って渡せ」

金色の輝きが俺の目の前に現れた。それは手に引っかかっていた
時渡りの石からの光か、それとも……。
気付いたときには、光はすっかり消えていた。

闇に落ちながら懐かしい声を聴いた。

『無事に逃げ出してくれたのね。嬉しいわ。貴方はまだ自分の力に気付いていない。お願い……を……して。』

俺の力……？待って……よく聞こえない。何をすれば……。

闇の中で託された言葉の意味も分からないまま、少年の意識は遠い彼方へ運ばれていった。

そこで待っているのは少年の知らない異郷の地、彼の意志に反して深まっていく悲しみと苦しみ……。

少年は無数にある可能性の中でどれを手にし、どれを捨て去るのだろうか……。

異世界での少年の旅が始まろうとしていた。

第1話 ～最初の出会い～

あれからどれくらいの間が経っただろうか。
陵は気がつくや冷たい土の上に倒れていた。

「ここは……異世界………?」

辺りは豊かな自然が溢れていて明らかに学校付近の景色ではない。
すぐ近くに見える建物は木で作られていてコンクリートなどは一切見えない。

来てしまったんだな……と溜め息を付いてこれからどうするかを考えた。

とりあえず、いつでも戻れるように時渡りのペンダントの確認をしておこう。

陵はいつの間にか首に掛けられていたペンダントを外し宝石の部分を詳しく見た。

ペンダントは最初に見た時よりも輝いているように感じられた。

「けっこう簡単に移動できたなあ……」

移動したときのことを思い返す。

あのときは無我夢中で……どうしてあの言葉が出てきたのかわからない。

『時渡りのペンダント、俺の意思に従って渡せ』

だけど……まだ俺が小さい時にどこかで聞いたことがあるような気がする。

小学生のとき……違う………もっと前だ。

そこまでは分かるのにそれよりも前の記憶を思い出せない。

「あれ？ おかしいな……。俺……。何も思い出せない」

生まれてから数年の記憶が抜け落ちている。

あるのは小学2年生の秋ごろからの記憶だけで、最近の記憶も少し消えている。

どうして俺は今まで不思議に思わなかったのだろう……。

ペンダントを誰に貰ったのか。俺はどうして倒れていたのか。

大事な何かを忘れているようで大きな喪失感が生まれる。

俺は……。俺の名前は……。

「アーティス!!」

突然聞こえた声が俺の思考を中断させた。

急いでペンダントを首に掛けなおす。

足音が陵に近づいてくる。

誰かに間違えられているのだろうか……。

異世界で初めて会う人なので緊張しながら次の言葉を待つ。

声のしたほうを見ると一人の少女が微笑みながら駆け寄ってくるのが分かった。

「アーティス、まだこんな所にいたの？ 忘れ物でもしたの？」

淡い金色の髪を風になびかせ、透き通るような水色の瞳が俺を見つめる。

会ったことのない少女に話しかけられて驚くが、どうにか冷静さを取り戻す。

「あの……。人違いではありませんか？」

陵は不安げな表情を作って少女のほうを向いた。
少女は驚いたような表情をして何かを探るように陵を見つめた。
すぐに間違えたか気付いたのか頭を下げた。

「ごめんなさい……。少し似ていたから……」

少女は少し怯えるような顔をしたが、一瞬で消えて元の表情に戻る。

陵はそんな少女に気付かず、普通に話しかけた。

「いえ……。気にしてませんから。ところで……。ここはどこでしょうか？ 道に迷ったんですけど……」

「そうなんですか。ここはランディオール。ここへ来るまで何かありませんでしたか？」

少女が心配そうに聞いてくる。危険な場所なのだろうか。
確かにこの世界へ来るまでに危険なこともあったが、それを言うわけにもいかない。

「いや……。特に何もなかったけど。それがどうかしたの？」

陵が不思議そうに聞き返すと少女は優しく微笑んだ。
少女が建物の立っているほうを指で示す。

「とにかく長老のところへ来てください。外からの来訪者は必ず連れて行かないといけません」

少女が陵の腕を掴んだ。少女の手から人の温もりとは違う何かを

感じた。

それを感じた瞬間に何かか俺の意識に入り込んできた。

前に何かが入り込んできたときは違う感じに不安を募らせるが、それは予想とは違う穏やかな物だった。

一枚の絵がまるで忘れていたものを取り戻すように自然に浮かんできた。

それは二人の子供が手を繋いで歩いている微笑ましいものだった。その絵に映った子供・・・後姿だったけど・・・。

「どうかしたんですか？ 早く行きましょう」

それが何を示しているのか考える前に少女に思考を中断させられた。

陵は少女の顔を見てから建物のほうへ歩き出した。

それにしても必ず長老に挨拶をしなければいけないとは面倒なことになったかもな。

第2話 く疑い

「しばらくここで待っていてください」

そう少女に言われてから数十分は待たされている。

ここは村の一番奥にある家で、すぐそこに森の入り口があった。この部屋の窓からもその森の入り口が見える。

森は村を囲むように広がっている。まるで外部からの侵入を防いでいるかのようだ。

『ここへ来るまで何かありませんでしたか？』

ふと少女の言葉を思い出す。確かに森を抜けるのは大変そうだ。

何か危険な動物でも出るのだろうか。

地球の森に出てくる危険な動物を想像して笑ってしまった。

この世界にも地球と同じような動物がいるのだろうか。

様々なことを考えていると、後ろから足音が聞こえてきた。すぐ近くで止まる。

「お待ちせしました。私がこの村を治めているマリーです」

陵が入ってきたのは別のドアを開けて女性が兵士だと思われる

少年2人を後ろに従えて入ってきた。

男性だと思っていたばかりに入ってきたのが女性で少し驚いた。

「さっそくですが、貴方はどのようなにしてこの村に来たのですか？」

異世界から飛んできたならここでした……なんて言っても分からないだろうしな。

道に迷っていたら着いたことにしておけばいいのか……。

「えっと……道に迷って………」

「そんなはずはありません。この村の周囲には守り神の力で結界を作っています。入れるはずがありません」

日常生活では聞きなれない単語に耳を疑う。

この村の周りには結界が張られているのか。

先ほどの少女が心配していたのは動物ではなく、結界のことだったのか。

「結界！？ ちょ……ちょっと待ってください」

嫌な予感がする。もしかしたら怪しまれているのかもしれない。

陵は立ち上がって声を荒げる。

「静かにしてください。あなたが質問に答えてくれなければ今すぐにでも………」

マリーの後ろにいた少年が剣を握り陵の横に立った。

そのまま座れと指示する。陵は急いで椅子に座りなおした。

少年の剣が外からの日差しで眩しいくらいに輝く。

おそらく答えなければ殺されるのだろう。

「嘘……だろ。俺は気付いたらここにいただけだ！ 何も知らない。」

マリーの目が鋭く光る。それは俺の顔から徐々に下へ移動して止まった。

その視線の先には光を反射して鈍く輝くペンダントがあった。
マリーは俺の右にいたほうの少年に何かを伝えた。
少年が急いで部屋を出て行く。

もう一人の少年は俺の後ろに立ち、剣を首の手前で止める。

「このペンダントは何？ 精霊の力を感じるけど……どこで手に入れたの？」

精霊の力……？

またよく分からない単語が出てくる。

そういえばこのペンダントは誰に貰ったのだろう……。

「知らないんだ！ 本当だよ！！」

「知らない？ 嘘を言わないで。私の知らない精霊ね。どの精霊と契約を交わしたの？」

マリーは陵の言うことを信じずにペンダントについて詳しく聞いてくる。

この世界では普通の単語でも、異世界からやってきた陵にとっては特別な単語だ。

どの精霊って……どんな精霊があるんだよ……。

「本当に知らない。気付いたら持ってた。アランとかいう奴に殺されそうになって……」

陵はそこで言葉を止めた。

怖い顔で俺を睨みつけていたマリーの顔がみるみる青ざめていったからだ。

俺の首に剣を突きつけていた少年も動揺しているように感じられ

た。

「今、アランと言ったわね」

「……そうだけど」

そういえばアランはこちらの世界の住人だった。

この世界の人が知っていたとしてもおかしくはない。

マリーの体は恐怖を感じてか震えている。

同じ名前の人が居たとしても恐怖の対象としては一致しているよ
うだ。

「アラン……。ついに動き始めたのね……。じゃあ、貴方は……」

マリーが陵の顔を見る。先ほどまでの険しい顔は消えて戸惑いだ
けが残っている。

陵は何が起こっているのか分からずに、その様子を黙って見てい
る。

「貴方……名前は？」

急に名前を聞かれて陵は不思議そうに首を傾げる。

動くことを許さなかった剣が陵の首から離れていく。

マリーの指示で少年が剣を元の鞘におさめたのだ。

「俺の……名前は陵。金森 陵……」

名前を恐る恐る告げるとマリーが少しだけ反応する。

マリーは少しの沈黙の後、やっとのことで言葉を紡いだ。

「そう……。さつきも言ったと思うけど私はマリー。この村の長で唯一の精霊使いよ」

急に自分のことを喋りだしたマリーに陵は不信感を隠せなかった。

「マリーさんは俺を疑ってたんですね？どうして今更……」

マリーは複雑そうな顔をして黙った。

長い沈黙のあとで少し口を開いたマリーが、ゆっくりと言葉を発する。

「私は貴方の敵ではありません。貴方が……」

「お呼びでしょうか、マリー様」

マリーが言葉を発するのを躊躇ったとき、一人の男が部屋に入ってきた。

少し前に部屋を出て行った少年が遅れてマリーに挨拶をする。

「シルア、リエル、部屋に戻っていなさい。レティオ、実は……」

マリーが少年2人を部屋から追い出し先ほど入ってきた男に話しかける。

レティオが陵の顔を見ながら真剣そうに頷いている。

陵は2人の会話を聞き取ろうと耳を澄ますが何も聞こえない。いくら声を潜めているとはいえ何も聞こえないのはおかしい。

陵は2人の顔を見ながら状況を把握しようとするが、その努力は報われなかった。

二人の会話は意外と早く終り、レティオと呼ばれた男が陵に近付

いた。

「私の名前はレティオ。この村の医者だよ。君の名前は陵なんだね？」

レティオは屈強そうな外見とは全く違う優しそうな笑みで話しかけてきた。

陵はまた脅されると思っていたため驚き、慌てて首を縦に振る。レティオが安心させるためか陵の頭に手を置いた。

「大丈夫だ。マリーは君たちの敵ではない。別の場所で詳しく説明しよう。ついて来い」

「えっ……君たち……の？」

ここには俺一人しかいないため、その言葉に強い違和感を感じた。

「ああ、本当ならば光の神子と闇の神子……どちらも消してはいけないからね……」

どうして俺が神子だと告げられたことを知っているのだろうか。陵は少し警戒したがレティオに敵意がないことが分かり頷いた。

第3話　く精霊く

移動を始めてから僅か数分で目的の場所に着いたらしい。
レティオが村の外れにある小さな家の前で止まる。

「ここが今日からお前が生活する場所だ。すまないな、他に空き家
がなくて」

そう言っつてレティオはドアを開けて中に入った。
続いて陵も家に入る。日本と違っつて靴は脱がなくてもいいようだ。
レティオが入っつてすぐの部屋に入る。
その部屋はまるで最近まで誰かが使っつていたように埃一つない。

「あの……この家っつて……」

「ああ、最近まで他の人が住んでいた。だが……」

レティオが陵の顔を見てから俯く。
もしかして……この家に住んでいたのっつて、ノエルの言っつていた
アーティスっつて人なのかな？

「いきなり旅に出ると言っつて皆の反対を押し切っつて出て行っつたんだ。
最終的には皆が納得した。理由があっつたからな」

「理由……？」

「おっつと話がずれたな。さて……単刀直入に言おっつ。君は異世界か
ら来たんだね？」

レティオの顔から笑顔が消える。
まるで先ほどのマリーのような真剣さを感じた。
だが自然とマリーのときのような恐怖は感じない。

「え……あ、はい。何でそれを……」

「以前、この村で同じようなことが起きたからな。それに……そのペンダント」

レティオの視線がペンダントに向く。

陵がペンダントを外してレティオに手渡した。

「やはり……。時空の精霊の力がこめられているな。それもかなり多くの……」

「それってどういうことですか？」

聞きたい事は山ほどあった。

時空の精霊やアランという人物、そしてこの世界についての様々なこと。

レティオは分かっているとしても言うように説明を始めた。

「精霊とは物事が起きる際に働いている力を生み出す存在だ。常に身の回りにあるのが火の精霊・水の精霊・風の精霊・地の精霊の生み出す要素。要素とは力の源のことだ。場所によって区切られている精霊もあれば、時間によって区切られている精霊もある。光の精霊・闇の精霊、海の精霊・山の精霊・空の精霊……そして時空の精霊」

陵は途中までは精霊ってたくさん種類があるんだな、と軽い気持

ちで聞いていたが時空の精霊が出てきたことよって真剣になる。

「時空の精霊は二つの世界を繋ぐ重要な役割りを担っている。簡単に使役できるものではない。だがこのペンダントには複数の力を感じる。ああ、誤解のないように言っておくが精霊は一人ではない。いや……精霊は一人だが、精霊が生み出している力にも意思が宿り生きている。このペンダントには時空の精霊の生み出した多くの力がこめられている。……理解できたか？」

陵は入ってきた情報を整理しながら僅かに頷いた。

レティオが陵にペンダントを返す。

これに……時空の精霊の力が………想像できないな。

陵はペンダントを装着しレティオの説明を待つ。

「時空の精霊は時空の狭間に存在している。その精霊を使役するくらい強力な力を持った奴が敵にいる………ということだ。お前の元に現れたアランが俺の知っている人物ならな」

「アランって何者なんですか？どうして俺を……。神子って一体………？」

陵の口から疑問が幾つか飛び出る。

レティオはしばらく考えてから少しだけ答えてくれた。

「アランはこの世界の全てを支配する王国ネイティアの特別魔術師だ。ネイティアの支配者………国王については良く分からないが、プルートと呼ばれていたのを聞いた」

『プルート』

その名前を聞いた途端に陵の体が動かなくなる。
まるで自分の体ではないような不思議な感じに襲われる。
それに気付いたレティオがふとペンダントを見ると先ほどよりも
輝きが増していた。

「……違う…………。アイツは……違う。俺の知っているプルート
じゃない!」

自分でも何を言っているのか分からなかった。
だけどプルートの響きがどこか懐かしく感じられて……。
ペンダントから伝わる言葉が陵を突き動かす。
少ししてペンダントが急速に輝きを失っていく。

「大丈夫か、陵。どうやら……そのペンダントにはまだ秘密がある
ようだ。他の精霊以外の意識が感じられる。この気配は……。先
ほどの言葉は……その意識の言葉か」

レティオが何かに気付き押し黙る。
陵が次に聞いたのは先ほどの会話とは全く違う内容だった。

「とにかく、お前は狙われている。気をつけてくれ。私は帰るが、
夜に娘を連れて来る。娘は料理が上手なんだ」

レティオがこの家の構造を話し終わり玄関へ向う。
それを見送って最初の部屋に戻った。

「このペンダントの中に精霊が入ってたなんて……」

今までの生活では絶対に信じなかったであろう事を素直に受け入
れている事が不思議だ。

それに家族や友達とも会えなくなってしまうのに冷静で居る事が何よりも信じられない。

夢を見ているのと同じ感覚で非現実的なことが起きている。

「どつせなら……今までのこと全て夢だったらいいのに………」

陵は溜め息を吐きながらも、この現実の中で生きていくことを決意した。

「そうと決まれば早くこの生活になれないとな」

陵はとりあえず教えられたとおりに廊下を進み一応リビングとして使われているらしい部屋にたどり着いた。

その部屋には本棚が複数あり、所狭しと書物が並んでいる。

中央に机と椅子があるだけで他には何も見当たらない。

とりあえず本棚に目を走らせるが見たことのない文字が並んでいて読むことができない。

「あれ……おかしくないか？」

さつき俺は普通にこの世界の人たちと話していたよな……？

本棚の中から適当に本を抜き出して中を見た。

そこに書かれていたのは見たことのないはずの言語。

他の本を確かめてみるが、どれも同じような意味の分からない単語が並んでいる。

「これが……この世界の本当の言語なのか？」

おそらくこの世界で聞かされたことの中で一番の謎であろう言語に陵は頭を悩ませた。

多くの時間を使って陵がようやく答えにたどり着いた。

「そつだよ……異世界から来た俺に分かるはずがない。前に同じことがあったはずだからレティオさんに聞いてみよう」

「この疑問に関しては後回しにして他の部屋を見てまわることにした。」

第4話　〜夢〜

気がつくと辺りは真っ暗だった。

自分の体だけが光の中に浮いている。

不思議と恐怖は感じない……いや、むしろ安心する………？

まるで今までの不安が吹き飛ぶような感じだ。

俺ひとりなのかと辺りを見渡すが闇の中なので何も見えない。

『……そこに居るのは誰？』

不意に後ろから誰かの言葉が聞こえて振り向く。

そこには俺の周りで発光している光と同じような光を纏まとった少年が居た。

少年は無邪気そうな笑顔で首を傾げていた。

俺は質問に答えようと口を開いた。

だが紡がれた言葉は自分の予想とは違ったものだった。

「俺……俺は誰だろう………」

思い出せない……。

俺は何かを言おうとしていたはずだ……。

名前、年齢、所属………。

様々な自分を思い浮かべるが、どれもしっくりこない。

少年は面白いことを思いついたように笑った。

『……じゃあ君は何をするためにここに来たの？』

少年の言葉が俺の頭に響く。

「俺は……何をするために？」

そういえば俺は何かをしなければいけないかったはずだ。
でも一体……何をすればいいんだ？

確か……ここに来る前に色々あって……。

『色々って例えば？』

声に発したつもりはなかった。

でも少年は聞こえていた、とでも言うように質問を続けてきた。

『あなたは今まで何をしていたの？』

何って……家で起きて学校に行って……。

『じゃあ、どうして君はここに居るの？』

どうして……って言われても俺には分からない。

そもそも俺は自分がどこに居るのかも分からない。

『そうだね気付いたらここに居たんだね。知ってるよ、君のことは……何でもね。』

少年が笑ったような気がして顔を見ようとするが上手く焦点が合
ってこない。

おかしいな……表情は感じる事ができるのに……。

ぼやけてしか見えないはずの少年の顔が次第にハッキリしてくる。

『おや……もう時間のようだね……』

少年が俺の後ろを指差した。

振り向くとそこには、俺たちを包む光よりも強い輝きをもった光が存在していた。

その光の向こうから誰かを呼ぶ声が聞こえる。

その声に引き寄せられるように光が近付いていく。

二つの光の距離は次第に短くなっていく。

『また会えるといいね』

その少年の顔を認識できたとき、俺の光ともう一つの光が一つになった。

その光に守られるように包まれながら俺は気を失った。

俺の意識は再び暗闇に運ばれていた。

第5話 夕食

「……………起きてください」

女性の声が聞こえて思わず母さんを思い浮かべる。

そういえば、この前も母さんに起こされたんだっけ。

でもここは異世界で、俺の住んでいた世界とは違うはず……………。

浅い眠りに抱かれながら様々なことを思い起こして、今までに聞いたことのある声だと気付いた。

「早く起きてください」

肩を揺さぶられて強制的に眠りから起こされる。

思い瞼を押し上げると、この世界に着いて最初に見た顔が目に入った。

次に目に入ったのはテーブルの上の美味しそうな料理と心配そうなレティオの顔だった。

「え……………あれ……………?」

驚いている陵を視界に確認して少女は満足そうに微笑む。

そういえば……………レティオさんが娘をつれてくるって言ってたなあ……………。

どうやら陵は二人を待っているうちに眠ってしまったようだ。

少女が陵の向かい側の席に座り、側にあつた皿を手渡した。

「おはようございます。さっきは挨拶もなしに本当にごめんなさい」

陵は少女から皿を受け取りながら首を軽く横に振る。

「いや、別に気にしてないし……」

そういえば結界の件はどう説明したのだろう……。まさか本当のことを伝えてあるのか？

「そういえば貴方の名前……カールって言うんですね」

「へ……何で……？」

カールって一体どこから……。

少女は陵が違う名前を言われたことではなく、知らないはずの名前を知っていることに驚いたと思ったようだ。

俺が欲しかった答えとは違うことを話し始めた。

「驚きましたか？ 実は父さんから聞いたんです」

レティオが申し訳なさそうな顔で陵をみていた。

レティオには何か考えがあるのだろう……。

陵はその偽名をありがたく使うことにして会話を続けた。

「そうなんですか……。あの……あなたは？」

「私はノエルです。よろしくお願いします」

ノエルの言葉に続いて、ノエルの隣に座っていたレティオが口を開いた。

「ノエルは俺の自慢の娘だ。仲良くしてやってくれ」

レティオがノエルの頭を撫でながら笑った。
ノエルは恥ずかしそうに頬を染めたが嫌がっている様子はなく仲
のいい家族だと思った。

「いえ、こちらこそ……」

タイミングを逃してしまい、陵が控えめな返事をする。
レティオはノエルの頭から手をどけて皿を持った。

「さて、そろそろ料理を食べようか。せっかくノエルが作ったの
に冷えては勿体無いからな」

陵とノエルも好きな料理を皿に取って口に運ぶ。
料理がなくなる頃には陵もすっかり馴染んで笑いあっていた。

第6話 二世界共有者？

「陵……。少し話がある」

ノエルが後片付けに行った少し後で、レティオが話しかけてきた。大事な話なのが空気で分かり、気を引き締める。

「はい、俺も聞きたいことがあります」

「ああ、そうだろうな。とりあえず私から話しておくことが3つ。1つ目は名前だ。こちらの世界に馴染みやすくするために私が考えた。ほんの気休めだろうが敵のこともある。これからは私もカールと呼ぶ。いいな？」

まるで自分の名前が本当にカールなのでは……と思うくらいに違和感がなかった。

カール……。か。どこかで聞いた気がする。

「それから2つ目がこれからのことだ。君は見たところ15歳ぐらいに見えるが……」

これからのことってなんだろう……。年齢に関係があることって一体……？

「あと少して15歳ですけど……」。

レティオは何かを吟味するように黙り込んだ。だが決心したのか真剣そうな表情で次の言葉を紡ぐ

「そうか、なら大丈夫だな。当てはまっている。明日から少し働いてもらうことになった」

働く……ってどんな仕事なんだろう。

その前に当てはまるという単語に興味を持ったが質問する暇は無かった。

この世界で生きていくからには働いて食料を得なければならぬのだろう。

そう決意して話の続きを待つ。

「内容は明日説明されるだろうが教えておこう。精霊との対話の補助だ」

それを聞いて陵は一瞬で不安そうな顔になった。

説明されても覚えられないかもしれない。

それに難しそうな仕事だし、見たこともなければ聞いたこともない。

「することは簡単だから安心しろ。昼間に会ったマリーの雑用をこなしてほしい」

雑用くらいなら俺でも出来るかもしれない……。

でも……精霊との対話だから大掛かりな儀式みたいなのを手伝わされる可能性も……。

「報酬は食料や衣類等の生活に必要な物の補助だから、かなりお得だろう」

仕事の場所は説明されても分からないだろうから、明日の朝にレイオさんが迎えに来ることになっているらしい。

「仕事については以上だ。最後に……質問をいくつかさせてもらう」

質問が書かれているのか、俺の答えをメモするのか分からないが
レティオが紙とペンを取り出した。

「君はナディアという女性を知っているか？」

聞かれたのは知らない女性の名前だった。

俺が狙われていることに関係があるのだろうか。

「ナディアさん……ですか。聞いたことは多分ないと思います」

曖昧な言い方になってしまった。

実際のところ俺には7歳ぐらいからの記憶しかない……。

レティオは曖昧な言い方に深く疑問を抱いたのか、そのことについて聞いてきた。

「俺には7歳ぐらいまでの記憶がないんです。今朝までは、その」と自体も忘れていました……。」

レティオは陵の話に興味深そうに聞いている。

そして何かに気付いたように何度も頷き会話を続ける。

「質問はこれで終わりだ。まだいくつか残っているが今はいいだろう」

レティオの伝えたいことが終わったので今度は陵から質問をした。

「この家にあつた本に書かれている文字が理解できなかつただけ

ど、普通に会話ができるのはどうしてでしょうか？」

レティオは少し考えてから可能性をいくつか述べた。

「そのペンダントに宿っている精霊か意思……。他には自覚なしの
二世界共有者とも考えられるな」

「二世界共有者……？」

陵が分からないという顔をしたのでレティオがすかさず説明をする。

こちらの世界では異世界の存在が知られているので、こんな言葉
が存在するらしい。

「面倒なので君のいた世界を地球、私たちの世界をネイティアと呼
ぶことにする。それで地球とネイティアには魂が同じ人間が対にな
って存在している。その中には互いの記憶を共有できる者もいる。
君たちの世界にも同じような人が居ると思うのだが……」

地球では異世界なんて誰も信じてないからな……。

漫画やゲームとかには使われてたりするけど、それはネタだろう
し……。

「まあ、とにかく二世界共有者は互いの記憶を共有して持っている
ので片方の世界の文化や言語が理解できるんだ。だが二世界共有者
もずっと記憶を共有しているわけではない。ある条件が満たされた
ときに記憶が共有されるケースが多いようだ。私たちは記憶を共有
している状態のことをリンクと呼んでいる」

リンクって英語じゃないか……。全て日本語に翻訳されるのなら

ともかく、英語まで……。

もしかしたら本当にこの言葉でリンクなのかも知れないが、今は確認する方法が分からない。

「でも他人の記憶なんて見たことありませんよ」

当然、陵には心当たりが無いので、この考えがつい口から出てしまった。

レティオが笑いながら先ほどの説明の続きを言う。

「自覚がない二世界共有者もいて、彼らは夢などで記憶がリンクしている。ただの夢の場合も多いから、ほとんどの人が気付かない。ただ……カールの場合は7歳以前までは普通の二世界共有者で、何か特別な出来事があったて記憶が消え、同時に繋がりが一時的か永遠に途切れてしまった……とも考えられる。」

記憶が消えるような衝撃を受けたか、繋がりが途絶えたことで記憶が消えたかは分からないとレティオは付け加えた。

「でも……その二世界共有者なら文字を読むことも出来ることになるんじゃない……」

「文字の読み書きは話すことよりも難しいものだ。二世界共有者ならば慣れてくると読めるようになるかもしれない」

レティオには他に考えられる要因がないらしく、陵のペンダントを見ながら目を閉じた。

まるで極めて静かな声を聞こうとしているかのように集中している。

だが目を開けたレティオは残念そうに首を横に振った。

「情報不足だ。後で調べておいてやるっ」

そこで会話が途切れる。

ノエルが後片付けを終えて戻ってきたからだ。

「私とノエルは暗くならないうちに帰るが、寝室の場所とかは覚えてるな？」

「はい。では、おやすみなさい」

レティオとノエルが帰った後で陵は早めに眠りについた。

第7話　〜魔力〜

いつもなら起きないであろう時間に目がさめてしまったらしく、外はまだ薄暗い。

再び眠ろうと目を閉じるも眠る事は出来なかった。

暇になったのでベッドから起き上がって窓から外を見た。

朝早いこともあって外には誰もいない。

「そついえば今日から働くんだよな〜」

レティオの言葉を思い出し、再び不安が頭の中を駆け巡る。

精霊に関する知識がまるで無い陵には不可能な仕事に思えるからだ。

レティオは大丈夫だと言ってくれたが、本当に出来るのだろうか。

フッフ……

「誰だ!?!」

どこからか女性の笑い声が聞こえてきた気がして辺りを探す。

部屋の中はもちろん、外にも人はいない。

声は一度しか聞こえなかったため風の音だと判断し窓から離れた。

しばらくベッドに腰掛けていたが、玄関のほうからレティオの声が聞こえてきたため慌てて廊下を走った。

「おはよう、カール。仕事の時間だ」

こんなに早いとは思っていなかったなので、早く目が覚めてよかったと胸をなでおろす。

レティオが用意してくれた服に着替えて家を出た。

「移動にどれくらい掛かりますか？」

「そんなに掛からないと思うが……」

歩きながら話しているとマリーさんの家に着いてしまった。

そういえばマリーはこの村で唯一の精霊使いだと言っていた。

このままマリーの家に行こうとしたらレティオに笑われてしまった。

「確かに雇い主はマリーだが、場所は家じゃなく……こつちだ。」

レティオは昨日見た森の入り口に入っていった。

「暗いですね……」

森は太陽の光が届かないくらいに深く、頼りになるのはレティオが用意していた松明だけだった。

森の形状は地球のものと比べても普通だったが、動物が一頭もいなかった。

この森はどんな森なのか気になったが、それを尋ねるよりも早く目的地に辿り着いた。

「待たせたな、マリー。ちゃんと連れてきたぞ」

今まで途切れることなく続いていた木々が見えなくなる。

そこは半径10メートルくらいの円を描くような開けた場所だっ

た。

「陵君……じゃなかったわね。カール君、こちらへ来てくれる？」

マリーが手招きしているのが見えて、慌てて移動する。

円の中心から描かれている模様の上に立ったときに何かの気配を感じた。

それが何かは分からなかったが、きっと精霊なのだろう。

「やはり素質はあるようね……」

立ち止まって何かを探すような行動をした陵を見てマリーは呟いた。

マリーは深刻そうな顔をしたが、どこか嬉しさも混ざっているような感じがした。

ふとこの場所にある唯一の出入り口のほうを見ると、レティオが居なくなっていた。

もう帰ったのだろうか……。

「どこを見ているの？ 儀式を始めるから手伝いなさい」

マリーの手には儀式で使うらしい杖が握られていた。

杖には宝石が1つ付けられていて、その真つ赤な宝石が本物の炎のように見えた。

「今から行つのは私が前に契約した精霊を呼ぶ儀式だから失敗はないわ。ただ、準備が面倒だから手伝ってちょうだい」

そう言ってマリーはポケットから小さい何かを取り出す。

それは白く崩れやすい石で、おそらくチョークのようなものだろ

う。

それと同時に紙切れも渡される。

「この契約陣は描いてる途中なの。2人で描けば早く終るから……」

「契約陣ってなんですか？」

魔法陣なら聞いたことがあるけど、同じようなものだろうか？

マリーは急いで作業をしたいのか、早口で説明を始めた。

「契約陣は精霊と契約する時や、契約した精霊を呼び出す時に必要となる陣のことで、精霊から認められなければ契約はできないわ。契約とは関係なく精霊を使役しえきしたい場合に描く陣が精霊陣で、この術はある程度の魔力と経験さえあれば簡単に出来るわ。他にも、魔力を高めたり魔術の効果を上げる魔法陣などがあるわ。魔術は魔力が無いと使えないし、魔力が無い人間はどれだけ努力しようと力を得る事はできない。カール君には魔力があるから大丈夫よ。さあ、作業に取り掛かりましょう。」

何が大丈夫なのか分からないが、今は聞かないほうがいいだろう。マリーは陵にどの部分を描くのか指示をして、自分は別の場所の作業を開始した。

陣を描き終えるのに1時間くらいは掛かった気がする。

その陣は半径5メートルくらいの大きさで、マリーは完成した契約陣の確認をしていた。

陵の描いた部分を眺めながらマリーがこの後の説明をする。

「とりあえず今日は私が契約した精霊を貴方に譲る儀式をするわ。ただ貴方の場合は特殊だから私とは違う方法で契約させようと思っっているわ」

特殊……別の世界の住人だからか？

「貴方の魔力は特別な。貴方の魔力は精霊の魔力に似ているから……」

マリーが説明に困ったように考え込む。

そんなに難しい内容なのだろうか。

「普通は人の魔力と精霊の魔力は別のものなの。精霊は人よりも上の存在だから、精霊は人の魔力を使うことができる。そして、人は精霊の魔力を利用する事ができない。そして精霊と人を普通に証で結ぶと人の魔力が精霊の魔力に変わっていくと同時に、精霊の魔力がそのまま人に流れ込んでくることになる。普通の人間に精霊の魔力が流れ込むと、人は精霊の力を制御できなくて暴走してしまうのだから、精霊石と呼ばれる宝石に証を刻むの。そうすれば精霊の力は精霊石に塞き止められるから安心よ。そのかわり契約を持続するための条件が増えるから大変ね」

あの時アランが持っていた石も精霊石だったのだろうか……。

綺麗な青色の石だった気がする。

今はどうでもいいはずの事が頭を巡っていた。

「さっきも言ったけど貴方の力は精霊と似ている……ほぼ同じものだろうと私は考えています。体に証を刻んでも暴走する事はないはずなの。むしろ精霊の力を直接使役することで強大な力を得ることが出来るはずよ」

あくまで推測の域を出ていない説明にマリーも不安そうな顔をしている。

大丈夫だと分かっているけど終わるまでは安心できないのだろう。

「証を体に……………」

鋭い針のようなものを思い浮かべてしまい心配になる。

宝石に証を刻むのだって表面を傷つけて付けているのだから人の体でも同じように……………」

「大丈夫よ。魂に刻むから少し苦しくなるだけよ。契約を取り消すと証も消えるから心配ないわ。ただ精霊が表に表れるときは額に浮かび上がってくるの。刻むというよりも赤い絵の具で描いたような感じかしら？」

最後が疑問系なのは見たことが無いからだろう。

本当ならば不安になるのだろう……………」。

だが陵は顔色一つ変えずに頷き、一時的に陣の外に出る。

それを確認したマリーが杖を振り上げた……………」儀式の始まりである。

第8話 火の精霊

振り上げられた杖から目も開けられないほどの輝きが溢れる。輝きが四方に散り模様の上をなぞっていく。

赤い輝きからは人に温もりを与える暖炉に灯る炎の優しさや全てを焼き尽くさんとする炎の荒々しさを感じさせられた。

おそらく様々な炎の集合体なのだろうと勝手に結論を出した。

模様全てが赤く輝いたとき、高く澄んだ声が森に響き、木々がざわめいた。

「契約の石に宿った精霊よ、我が意思に従って我の前に現れよ」

儀式は思ったよりも簡単で結果はすぐに現れた。

マリーの目の前に巨大な炎の渦が発生する。

よく見ると渦の中央付近に小さな人影が浮かんでいる。

「久しぶりだな、契約者マリー」

頭に響くようにして聞こえた重々しい声。

これが精霊の声なのだろうか。

マリーが最後の仕上げに杖を契約陣の中央に突き刺す。

「前に呼び出したのは結界補強の儀の少し前だったかしら……」

これ後で契約することになる炎の中の人影をすっかり見ようと集中する。

その努力が報われたかは分からないが、炎の中にハッキリと若い男の姿が見えた。

炎を象徴するような赤い髪と瞳が炎の中で揺らめいて見えた。

その男と目が合った気がするが、すぐに逸らされてしまう。
男の目は鋭く睨み付けるようだった……。

『ところでマリィ、俺を呼び出した理由を聞いてもいいか？』

今更ながらに儀式の意味を思い出したらしい男が契約者であるマリィに尋ねる。

男の問いの答えとしてマリィが陵を指差す。
マリィの顔は真剣そのものだ。

「あの子なんだけど……ほら、例の………」

『ああ、あの子か……』

話題となつている陵を除く2人だけで勝手に話を進めていく。
事前に伝えてあったかのような反応に不審感を募らせながらも、
とりあえず精霊に話しかけてみた。

「あのお、何で俺のことを知っているんですか？」

精霊は少し驚いてから何かに納得したようにニヤリと笑ってマリィに目配せした。

もはや男に威厳というものはなくなっていた。

友達のようにマリィと話している男が口を開こうとした。

それを見て、マリィは炎の渦に向かって地面に突き刺したのとは違つ杖を投げつけた。

精霊にそんなことをして大丈夫なのか？

水色の輝きが炎を消して男の顔に突き刺さろうとした。

『危ないじゃないか……』

男は杖を軽く手にとり、急いで模様の外へ投げ返す。
杖は凄しい勢いで地面に深く突き刺さった。

「それくらいじゃ死なないでしょう？ 余計なことを言っていないで早く儀式を終らせるわよ、火の精霊^{サフランダー}」

その呼びかけを合図に火の精霊が杖に近付いた。

マリーは陵を手招きして炎の正面に立たせた後、模様の外から指
示を出した。

「カール君、契約は陵じゃ駄目だから！ カールとして契約してね」

偽名を使うように言われた後は全く指示が無く突然に契約の儀が
始まった。

第9話 ～契約の儀～

契約の儀が始まると同時に、目の前の炎の渦が徐々に大きくなつていく。

炎と自分の居る位置との距離が縮まっていき、ほんの数秒で体に触れた。

炎が陵の体を何事もなかったかのようにすり抜ける。

陵が後ろを振り向くと模様の範囲ギリギリまで行って止まった炎の壁が見えた。

蔽かな空気が炎の内側に広がっている。

『今から契約の儀を開始する』

目の前に居る男……火の精霊サラマンダーが杖に付けられている宝石を取りだす。

宝石に証らしき模様が浮かび上がっている。

『我は火の精霊サラマンダー……名をフィレント。我との契約を望む者よ、その名を我に示して証を受けよ』

「我が名はカール……」

どのように言えば良いのかわからなくてフィレントの真似をしてみる。

緊張している陵を見て、フィレントが笑みを浮かべる。

フィレントが宝石の証が描かれている部分を陵の額に当てる。

『私の力の源である要素を証として、お前の魂に刻み込もう。我が力を借りたいときは私の名を呼べ』

額に当てられている宝石から熱い何かが入り込んでくる。
フレントが宝石を陵の額から離す。
その宝石からは証が消えていた。

『証は刻まれた。汝の願いは汝の魔力を代償として必ず叶えよう』
周りを覆っていた炎の壁が陵の中に入るように小さくなっていく。
炎を通してフレントの意志が頭に入ってきた。
もう慣れてしまった感覚に身を委ねながら、通り過ぎるのを待つ。

『これで契約の儀は終わった。我は汝の中で眠りにつつ』
言葉が聞こえなくなる……。
目の前が赤色に染まった後、何も見えなくなる。
薄れていった意識の奥で懐かしい夢を見た。

『また会えたね』

真つ暗な空間に少年が浮いていた。
また……？ 前にも会ったことがあるのか……。
思い出せそうで思い出せない。

『記憶の扉が開く……』
少年の指差したほうを見ると扉が4つ並んでいた。
そのうちの赤い扉が音を立てて開いていく。

「鍵となる精霊を集めて……思い出して………」

光が俺の体を包んで何も見えなくなる。

見えないはずなのに、少年が手を振っているのが分かった。

そこからは流されるように光の中を彷徨った。

音と映像が今までに無いくらい鮮明に流れ込んでくる。

流れ込んできたのは幼いころの僅かな記憶。

暖かくて優しい誰かの温もりに包まれながら再び眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0424ba/>

What connects bonds

2012年1月4日17時45分発行